

NEWSLETTER

THE JAPANESE SOCIETY FOR
PARAPSYCHOLOGY

NO. 27

August 1980

第11回夏期研修会の報告

1980年8月29日(金)から31日(日)まで3日間第11回夏期研修会が静岡県佐久間町清流荘で行われました。今回は運営委員であり、佐久間町山香診療所長でもある長嶋金興先生には用金準備から全の運営、宿の調整に到るまで何かし何までお世話頂き、大変感謝致しております。紙上をかりて改めて御礼申し上げます。

出席者は12名、近來かなり盛況でした。全沢氏の司会が第1日目の午後は「コンピュータを利用したPSI実験のこころ」の題目で、六車、笠原氏の発表があり、ついで長嶋先生の御自身の長嶋雲兵衛氏の「計算機理論の講義」と「計算機利用による統合的選別」の研究の解説がスライドを駆使して行われました。

夜は萩原氏の司会が「超心理学あるこれ」という座談会が開かれ大谷氏のPA conventionでの話題や参加者メンバーの及ぶ超心理学の未来像などに話が花が咲きました。

第2日目は午前中は「死後の存在のこころ」という題目で司会は六車氏。まず全沢氏がC. D. Broadの "Human personality, and the question of the possibility of its survival of bodily death," (1954) の紹介を行われ、死後の存在の哲学的意味などに話されました。ついで笠原氏が「ある患者の症例を記憶という長が説明し、これに関連して reincarnation と possession について興味深く話されました。最後に長嶋氏が長年患う「死期の予知のこころ」の研究を発表されました。これは日本はもと世界でも例を見ぬ 2 = -1 の予知です。

午後はまず大谷氏の第23回PA convention 参加報告から始まりました。開催地 Iceland の风光や参加研究発表の雰囲気から始られ、発表諸論文の内容が面白いと語られました。現代超心理学の最新研究状況が目の前まで語り、大変興味ある刺激のある話でした。

次に数年 Kirlian 写真実験と云々人である山本氏は

人間が普通状態の時と、精神不安定の時、念集中するとき、それらの写真に變化が生ずることを自分から与えた数回の写真と来しあがり、興味深く話されました。最後に、長嶋氏が参加者全員に GESP Card test を行いました。まず最初の2ラウンドは平常の状態で行った。次の2ラウンドは全員を3グループに分けて行いました。すなわち、精神安定剤やアルコールを服用したグループとコントロールグループの3群でした。夜は懇親会と和気あふみの中、超心理学の楽しい話の語りあいの夜のもっとも忘れられない夜でした。

さて、第3日目、朝から小雨も降るぐうぐう天気でした。我々一同は佐久間町を見学し、天竜川渓谷の自然の美しさと当時最新の技術と駆使して構築された夕日の機能の深い知識と眼を見ました。正午思いきう3日間の研修会を終え、中野天竜駅で解散致しました。

この3日3夜の意味は近年に類する夏期研修会では無いと思います。

今回の成果を出来るだけ早く皆様にお知らせするため news letter の臨時発行にいたしました。右添付の要約を以下に掲載する予定です。

日本超心理学会第13回大会の開催について

本年度大会は12月20日(土)、21日(日)の両日に開催する予定です。目下準備をすすめております。次のニュースレター大会開催表を参照してください。沢山の研究発表と多数の方々の参加があるよう、会員各位の御協力をお願い致します。とくに研究発表を志す方は今月中に題目を定めておいて下さい。

NEWSLETTER OF JSPP No. 27, 1980. 8. 31 発行
© 編集発行 日本超心理学会 (領価 200 円)

第23回 P.A. Convention

大谷 宗司

第23回 Parapsychological Association 年次大会は、アイスランドの Reykjavik, Univ. of Iceland で、本年8月13日より16日まで世界の超心理学者参加の下に行われた。今回、日本超心理学会より参加する機会を得たので、大会の模様を概観について報告する。

研究発表の総数53、内 Full paper 23, Research Brief 30, Symposium 1, Roundtable 3, Workshop 1。朝9時から5時過ぎまで、昼休み約1時間、夕方5時研究発表サシホロウム、夜は、第1日 Workshop, 第2日 Presidential Address, 第3日は Banquet, Invited Address という充実した日程であった。研究発表の分類は今回は下記のようであった。

- Remote Viewing, Studies with Children
- Metal-Bending, Problems of Randomness.
- Philosophy of Parapsychology, Poltergeist
- Personality Variable, Psi-Conductive State,
- Ganzfeld Technique, Miscellaneous Topics.
- Symposium の題目は Apparition, Roundtable の
- 第1は Social and Ethical Issue, Reliability and Other Ignored Issue, The Distribution of Psi,
- Workshop は Statistical Significance or Statistical Artifact? という題で discussion が行われた。発表数を国別に見ると、米国が圧倒的 2/3 を占め、ついで英、独、蘭、アイスランド、日、豪 1 と 11 の順であった。我々の発表は、栗原 邦彦、今井 大谷 邦子 A Study on PK ability of a Gifted Subject in Japan と題する論文で、清田 益章 君を被験者とする PK (spoon-bending, thoughtography) による心理・生理的研究と大谷、栗原 邦子 Effect of Short-Term Stimulus upon ESP Function と題する前回の P.A. 大会で発表した実験結果の生理的条件的考慮した分析結果の報告であった。前者は Metal-Bending のグループ、Univ. of California, Irvine の Shaper, Univ. of Tasmania の Keil と共に発表した。

Shaper の研究は多くの被験者とグループとして2年かけて研究したもので、PK能力の誘導という点で特色があり、Keil のは自然的条件での観測結果の報告であり、我々の発表は、心理的・生理的・生化学的因子を介した多角的アプローチであることと特色があった。大谷 邦子 Short-Term Stimulation の効果についての報告は、GSR が重要な役割をしており、Mind Science Foundation の Broad は自分の発表との関係において深い関心を示していた。

本 Convention の主な発表については、次回の月例会で発表されることになっており、全体の印象を述べると、様々である。

今回は、開催地の地理的位置の関係もあり、参加者数は例年のように少なかった。しかし少数の人と持ち、現在超心理学の領域で活躍中の主要な研究者が一室に集り、また長年としてはオランダの Zohar 博士、参加したことは意義が深いことであった。また、仮面をよく話し日本の研究に対し大きな関心を寄せられた。もともと超心理学の研究者は数が少なく、本故に相互によく知り合っており、オランダの参加者が親密感とあふむ雰囲気のある学会である。今回もそれと確かなり、大変に心強く感じた。将来のうちに日本の研究者の数が増え、11 くらいに望む。我々の発表は1昨年1件、今年度は2件である。これから毎年必ず2件は必ず提出出来るよう、より高度なより深みのある研究と総之固く進めたいと思う。

C.D. Broad による Survival の分析

金沢 元基

人間死後存続の問題が今日新しい角度のもとで見直されていることは周知の事実であるが、これは人の人格や意識の本質に關する重要な問題であるの實體に迫るためにも、多くの実験・観測が必要であるとして、'死後存続' という概念の意味の分析、モデルや仮説の設定が望まれている。しかし後者の面についてはまだ殆ど進展が見えない。

この意味で、イギリスの哲学者 C. D. Broad が 1959 年 キャンブリッジ大学で行った Perrott Lectures の中の "Human personality, and the question of the personality of its survival of bodily death" は重要な、これまでのごとく殆ど唯一のものである。以下簡潔にその概要を紹介しよう。

人間の人格が 身体に死後存続しうるかどうか、それは (1) どのような体もまた (2) ある種の体と結びついているかである。(2) の体は (i) 非物理的な体と (ii) 物理的な体とに分けられる。人格が死後存続するといふためには生前と死後の個人の経験の流れの間に連続性と類似性が必要である。この流れはどのような体も存在し得るが、その別所を矢張り具現化不可能である。死後存続の必要はあるが十分でない条件は人格の dispositional basis (傾向的基盤) の全体的もしくは著しい部分が存続し、身体が死後ある期間、少なくとも組織の特徴形態の大凡を維持することである。通常この基盤は脳、神経系の微細構造とその他の内部に進行する回路的物理的過程の中に存在することが考えられる。しかし、死後存続を認めるとすれば、この基盤を荷う非物理的存在が必ずしも必要である。これを ψ -component (成分) と名付ける。 ψ 成分には完全な person である必要はなく、延長をもち、身体と結合するときは quasi-physical の語調が与えられる。discarnate な ψ 成分は (i) disembodied であるとき (ii) 生前の身体と結合していた形と類似の形を non-physical analogue と結合していき、また 2 つに分けられる。次の 4 つの可能性がある。

(1) 過去の経験の流れとも結合しない。 (A) 孤立した多少とも連続的な経験の流れと結合するが、この流れは低い生命体の意識水準に達しない。(B) 統一性はあるが、人格の完全な特徴はまた別の夢の状態の過去の経験の流れと結合する。ここでこの流れは生前の経験の想起も含む。(4) 連続的に高度に統一した、覚醒時の経験に似ている流れと結合する。(4) はさらに (1) この経験流に含められた想起はすべて死後の経験に關係する。(2) 流れのあるものは生前の経験に關係する。1 に分けられる。

(B) では 2 つの可能性がある。 ψ 成分と結合した人格が (A) 覚醒時の人間が夢を思い出すように、(B) 覚醒時の人間が以前の覚醒状態を思い出すように、生前の経験を思い出す。多くの定説は ψ 成分と人間の身体と結びついていて ψ 成分がその身体との結合が完全に破れ突然の死後は余りの内部構造、リズムの喪失に等しいと考へられる。このことから死後人格の完全な存続は皆無ありえないことである。

(i) の場合、高度 delusional, quasi-perceptual の経験の流れがあるにせよ、この dream-like 状態は死後の生前の経験の流れと連続性をもち、それはまたある程度 (ii) の場合、 ψ astral body が存在し、生前の physical body と interfuse しているか、死後の経験流と生前の ψ 成分はかなりの連続性をもち、考えられる。mediumatic communication の十分立証は例がこれほどく、生者からのテレパシーや霊障の dramatization に ψ 説明されるという主張は受け入れにくい。これはテレパシーの概念を無意味なまでに拡張することである。しかし、十分な例を以て、生前の人格の傾向的基盤のある一部はつとに存続し、また、持続する ψ 成分が霊障の身体と結合して、死後、 ψ 成分と結合した人格の経験流もまた、生前の人格の死後の状態、形成を 発動する新しい計画を、新しい経験の ψ 成分と交差して得られるであろう。cross-correspondence の最良の例はこれらのものである。

傾向的基盤が死後存続するとしても、それはつとに同じ運命をもたねばならぬという理由はない。死の瞬間における人格の発露状態と死が起る状況がいろいろの可能性を与える因子であろう。したがって、死に際し、 ψ 成分が消滅したり、 ψ 成分が弱く、エネルギー、能力の欠如のため、通信の可能性が欠け、不可能である場合が生ずる。死後存続の問題は、それがどの程度かは、すべての人が存続しうるか、存続するか、つとに同じ意味で存続するという all-or-none の考えである。

Survival 研究と記憶

笠原 敏雄

reincarnation, possession は multiple personality とは明確に区別されるべきものである。理屈の上では、reincarnation とは、すでに死亡した人格の生まれかわりであるか。実際には、前世記憶に基づいて研究を行なう方が多いので、結局は記憶の研究である。Possession に関しても同じことが言える。ところで、paranormal な記憶と normal なし abnormal な記憶とは、理屈の上ではともかく、実際には判別のおおむね難しいものである。たとえば、心因性疾患の患者の中には生後半年くらいの時の記憶に一生を占めてしまっている者も少なくないが、その記憶と意識の結びつきがどういとも簡単に生じてくるものである。このおぼろげな記憶がある以上、paranormal な記憶は厳密には、このおぼろげな記憶の可能性を排除することが、その存在条件となる。reincarnation と possession とは全く別種の現象と考えることもできるか。憑依の時点が違えば憑依現象の二型と考えることもできる。今回は、reincarnation memory の実地研究の第一人者 Jan Stevenson 博士の研究を紹介する。博士によれば、現在ビルマに、前世が日本兵だったと主張するビルマ人が2,30名いるというが、そのうちの1名に関しては、gender dysphoria の症例報告として Journal of nervous and mental Disease に掲載されている。この症例は20代の女性であり、幼時飛行機恐怖症があった。その後前世の記憶と称する物語りをするおとなり。一方、ビルマ人も日本人に近い嗜好を示すおとなり。腹巻を好むおとなり。生魚を食べたおとなりしたのである。この女性の語るところでは、自分の前世の姿である日本兵は、日本の北部に家があり、5,6人の子供をもつ。小工場の主としており、軍隊では炊事兵であったが、撤退中、大木の山の麓に炊事の仕度度をしていす時、急降下してきた、尾翼の2枚ある戦闘機

にやけい部とうられて即死したという。この飛行機が日本兵だったために、本人は解剖学的には女性であるにもかかわらず、自分が女性であることを認めながらも、男性の服装をし、男性としてふるまう。そのため小学校を退学したおとなりである。前世記憶を保持している Subjects は、前世は現在の自分の性と同じ性別だったと主張する者かほとんどであるという。ビルマの日本兵だったと主張する症例は、半数ほどが女性に「生まれかわっている」といっている。しかも非常に女性らしい女性にあり、先述のバタ症例は、この点では例外であるといえる。

Reincarnation や possession のひとつの表われとして、Xenoglossy という現象がある。これは、Subjects が本来知ることのできない言葉を、意識下ないし催眠状況下で語る現象のことである。この事例に関しては Stevenson 教授は3例ほど報告している。そのうちの1例は、American Journal of Psychiatry に医学論文として掲載されている。最後に、日本でもこうした Survival を思わせる現象は少なからず観察されると思われ、現段階では全く研究が進められていないといえる。今後、日本心理学会で、Survival 現象の研究を目標とする学会をつくり、研究を進めようとするべきであると考えられる。